

終章

1. 大学を取り巻く環境の変化と対応策

- 1) 世界に類例を見ない勢いで進展するわが国の超高齢化は、新たな社会保障制度や人材育成システムのモデルを自力で創生するための豊かな創造性を、国民すべてに求めている。
- 2) 少子化による 18 歳人口の減少と高等教育のユニバーサル化は、大学教育体制の全く新たな取り組みモデルの創出を、大学構成員すべてに求めている。
- 3) わが国の私立大学は、従来、大学進学者の 7 割以上の人材育成を担っており、大学教育における質・量両面にわたり重要な役割を果たしてきた。
- 4) いま、大学は、2005 年の中教審答申「我が国の高等教育の将来像」が提言する「入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）」「教育の実施に関する基本方針（カリキュラム・ポリシー）」「卒業認定・学位授与に関する基本方針（ディプロマ・ポリシー）」の明確化と内実化が求められている。
- 5) こうした社会状況は、「保健・医療・福祉の連携・統合」を教育理念とする、本学の果たすべき役割が益々重要であることを物語っている。

2. 本学の目指すもの

大学は、優れた社会人として活躍するために、専門分野を深く学ぶとともに、幅広い教養と豊かな人間性を身につける人間形成の場である。

大学ユニバーサル化の時代において、個別大学には教育の質の向上とそれらを保証するシステムと構成員の意識改革が求められている。それが大学の個性化と特色化につながる。

本学は、「薬学部」「歯学部」「看護福祉学部（看護学科・臨床福祉学科）」「心理科学部（臨床心理学科・言語聴覚療法学科）」の 4 学部 6 学科から構成されており、「薬剤師」「歯科医師」「看護師」「保健師」「社会福祉士」「精神保健福祉士」「介護福祉士」「言語聴覚療法士」の国家資格と「臨床心理士」の認定資格者を養成する総合医療系の私立大学である。

これまでの 2 回の大学基準協会における相互評価では、本学の教育プログラムにおいて、専門教育は明確であるが、本学全体としての教育目標を実現する教養教育を含む一般教育が確立していないとの指摘を受けていた。特に、近年、大学教育を受けたことの質保証として学士力・社会力を身につけることが、その基本的目標とみなされている。

本学は、大学全体の教育力向上と全学共通教育を担う組織として、2007 年「大学教育開発センター」を設立し、共通教育は全学教育として展開される枠組みを構築した。その取り組みと成果は、本文中で縷々述べているが、よい評価を期待したいところである。

3. 教育改革の方策

いわゆる大学全入時代を迎え、学生の多様性が進展した今日、大学としての体系的な教育内容・方法を確立したり、統一的な学習評価を通じた質の管理を行ったりしていくことが困難になりつつあり、大学の教育改革は喫緊の課題である。このような状況を踏まえ、「大学教育開発センター」を設置したことの意義は大きい。

教育力の向上は、全教員が一致して取り組む必要があり、教育力向上研修(FD)活動は、多様な教員を任用するなかで、各学部・学科の要である。FD 委員は、組織的教育力向上のために、強力なリーダーシップを発揮するとともに、大学として FD の推進・実質化と組織的教育力向上プログラムへの各教員の貢献度を測る教員評価を強化する必要がある。また本学の FD 委員会は、大学教育開発センターと強く連携して、さらなる発展のために以下の活動を強化する必要がある。

- 1) 多様な内容の FD を実施し、成果を実質化する。
- 2) 大学の組織的教育力向上活動へ結び付く個々の教員の参加と努力を評価する方策を確立して実施する。
- 3) 大学・学部の教育力向上を組織的に牽引する活動を評価する。

- 4) 学生の授業評価、各教員の授業担当説明、および組織的教育力向上活動を記録した各教員の教育ポートフォリオを教員評価に機能させる。
- 5) 大学の組織的教育力向上活動へ結び付く個々のFD委員・その他の教員のFD企画実施活動を評価する。
- 6) FDへの積極的参加を評価する。
- 7) とくに、新任教員や初回参加は、FDを通して教育の基本の研修とともに、PDCAサイクルをふまえた大学教員としての行動規範、教育倫理規範も学ぶ機会を設ける。

4. 自己点検評価の意義

高等教育のユニバーサル化が進行し、大学の入学者選抜が従来のような入学者の質の保証の機能を保持することが難しい状況下で大学は、かつてないほど厳格な学習成果の達成を求められている。大学が激変する環境に対応するためには、思い切ったパラダイムシフトが必要である。全教職員は、この状況を十分に認識する必要があるであろう。

自己点検活動は、自らを厳格に分析し、改善点を洗い出す作業である。自己点検の作業は、日常的に意識していない項目についても見直すこと、すなわち、日常を非日常化する努力であり、他者の目で自己を見直す作業である。

自己点検の過程を通じ、大学の各部局の多様な教職員を結集して、大学の理念や社会的存在意義などを議論し、優れた部分と劣る部分を分析し、問題点と改善方策を明らかにし、解決に向けて動き出すことは意味のあることである。さらに、この活動を意義あるものとするためには、単に、種々の問題点を白日の下にさらけ出すだけでなく、問題点を大学構成員全員が共通認識として共有し、改善策を模索し、それを実行する契機とすることである。したがって、自己点検報告書は、大学の生い立ちから始まり、現在を分析し、そして未来に向かって発信する羅針盤の役割を担うものである。

このたびの自己点検評価の活動は、大学の将来にとって非常に重要な作業であり、本学の教育・研究活動を通して、社会に貢献できる医療人としての人材育成が達成されているかを検証するいい機会となった。しかし、“他者の目”が十分に機能せず、十分に点検・評価されていない不備な部分も多いと思われる。「大学基準協会」から真の意味で第三者の評価を仰ぎ、終章とする。